

排水・雑草対策の徹底で、
単収 200kg 以上、2 等級以上を目指しましょう！

ここがポイント！！

- 1 出芽・苗立を高めるため碎土率を 70%以上確保！
- 2 「里のほほえみ」は裂皮防止のため6月上・中旬に播種
- 3 帰化アサガオ類は「つる」が出る前に体系防除を徹底

1 施肥

(1) 酸度矯正

石灰質資材の施用で土壌 pH の矯正(目標 6.0~6.5)とカルシウム補給
(施用量のめやす「消石灰」100kg/10a または「炭カル」120kg/10a)

(2) 基肥等

- 基 肥 成 分：10a 当たり窒素 1.5~2.5kg、リン酸 6~8kg、カリ 6~8kg を基準に施用
(施用量のめやす「ニュー大豆 800」20~30kg/10a)
- コ ス ト 削 減：肥料の低コスト化として、化成肥料の代替に鶏ふんの利用も有効。
- 緩効性肥料の利用：地力の低いほ場では、追肥分が含まれた基肥全量施肥肥料を窒素成分で 7~8kg/10a 施用するとしわ粒等の対策となり、増収も期待できる。(施用量のめやす「ワンタッチ大豆」40kg/10a)

2 耕うん・播種

(1) 適切な耕深と碎土率 70%以上の確保

目標：耕深 13~15cm、碎土率（2cm 以下の土塊重量割合）70%以上

～碎土率 70%以上を確保するポイント～

- ア 排水対策を早め実施するなど、ほ場を十分に乾かす。(特に水田に隣接するほ場)
 - イ 低速走行とロータリー高回転で、丁寧に耕うんする。
 - ウ アップカットロータリーやドライブハローを使うと表層の土が細かくなりやすい。
- ※複数回耕うんする場合は、1回目を丁寧に(1回目が粗いと2回目以降は細かくなりくい)。



(2) 播種

- 種子は播種前に塗抹等の薬剤処理を行う。(紫斑病・初期病害虫防除、鳥害防止)
- 耕うん・砕土・整地・播種は同じ日に行う。(土壌過乾燥による出芽不良防止)
- 品種別の播種量・密度のめやす

品種名	播種時期	目標苗立ち数	播種密度		
			畦幅 (cm)	株間	
				1粒播き	2粒播き
里のほほえみ	6/1～6/15	9～18本/m ²	75	6～11cm	12～23cm
エンレイ(標準播)	5/20～6/10	9～10本/m ²		10～11cm	21～23cm
エンレイ(晩播) あやこがね	6/11～6/20	13～18本/m ² 16～19本/m ²	75	6～8cm	12～16cm

- 播種目皿が詰まらないように注意する。(種子の大きさ、塗抹した薬剤の剥がれに注意)
- 播種深度:3～4cm(土壌水分が高めな時はやや浅め、乾燥気味な時はやや深めに調節)
- 畝立て播種は、畦の高さは10cmをめやすとし、播種後は畦間の溝を確実に周囲明渠に繋げる。

【畝立て播種の効果】

- ・土壌の通気性・透水性が改善され、地温も高まる(出芽・初期生育良好)
- ・窒素吸収率が増加し、落葉速度が遅くなる(ちりめんじわ粒発生軽減)

〈「里のほほえみ」播種時の留意点〉

- ・裂皮防止のため6月上～中旬に播種
- ・目詰まり防止のため播種機の見皿は大粒用に交換

3 雑草防除

- 耕起前に雑草が多い場合、耕起前に大豆に使用登録のある茎葉処理除草剤を散布する。
- 播種覆土後は、ただちに土壌処理除草剤を散布する。

～土壌処理除草剤の効果を高めるポイント～

- ア 砕土率を高め(除草効果向上)、覆土の厚さは3cm程度を確保する(薬害防止)。
- イ 覆土後ただちに散布し、乾燥または過湿の状態での使用を避ける(除草効果向上)。
- ウ 砂土では薬剤が土壌に吸着されず薬害を起こすので使用を避ける。

※帰化アサガオ類が発生している場合は、効果の高い除草剤と中耕・培土を組み合わせた体系防除を実施する。



帰化アサガオ類 マルバルコウ

※他にもホシアサガオ、マメアサガオが県内の大豆ほ場で確認されている。

帰化アサガオ類対策のための体系防除

- ① 土壌処理除草剤(播種後出芽前)
- ② 茎葉処理除草剤1(大豆2葉期から開花前)
- ③ 中耕培土(開花期まで)
- ④ 茎葉処理除草剤2(株間処理:大豆5葉期以降雑草生育期)